

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2021年08月
「お金」の法則
(⑤量的緩和とインフレ)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com

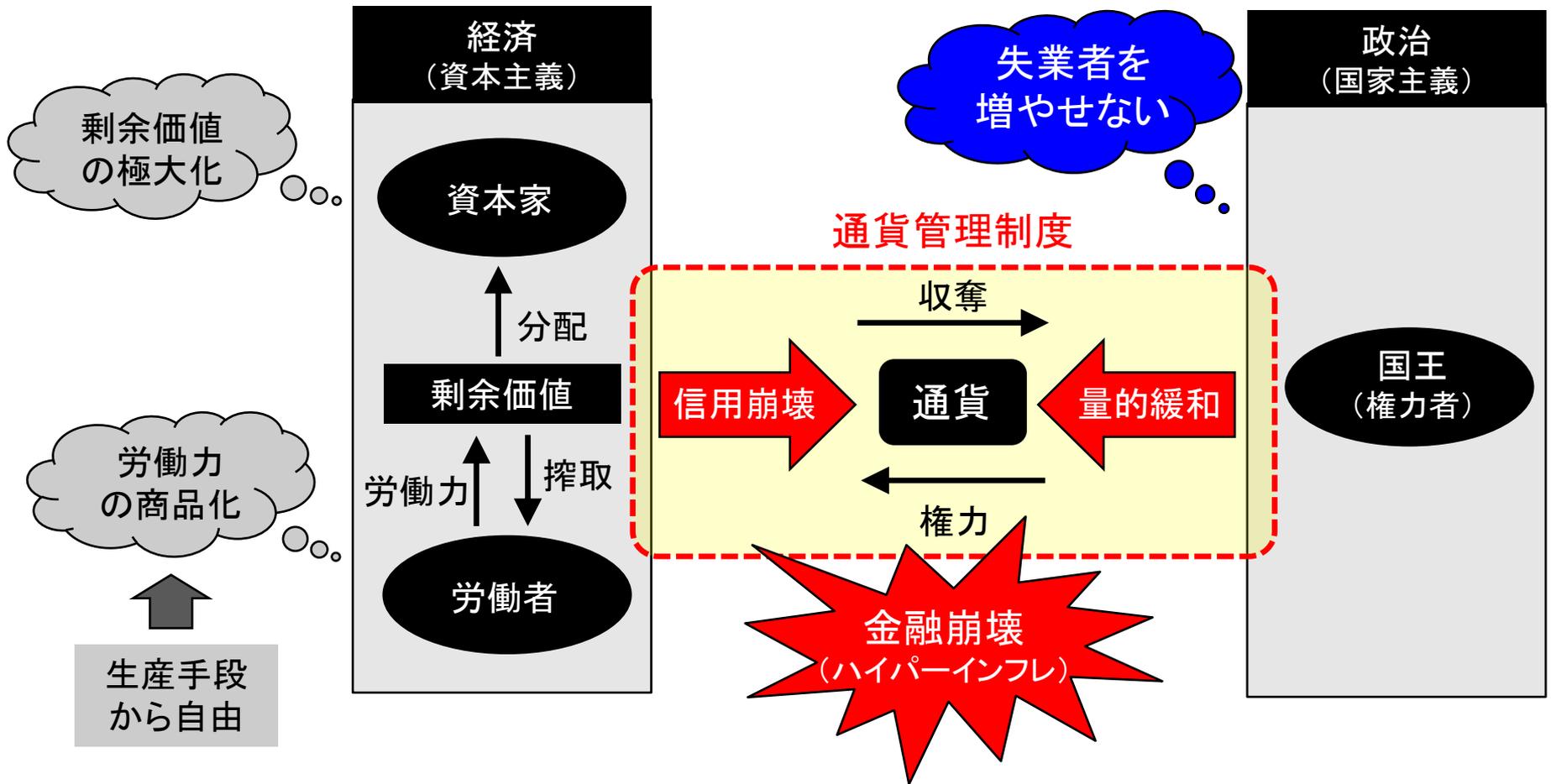


ピカイチ先生

ピカイチ生活経営塾

検索

【論点】資本制社会のしくみ



いま私たちは、バブルの中にいる (1/2)

それでも、バブルはバブル。一刻も早くバブルから離れよう、そしてバブル崩壊後への準備を怠りなく、大きなチャンスだと訴えたい。

もはや時間の問題ともいえる **金融バブル崩壊** では、株価など金融マーケットが大暴落するだけではない。バブルに踊った企業や金融機関などが、巨額の投資損失や評価損そして不良債権の山を抱え込んで、塗炭の苦しみに喘ぐのは当然のこと。

その先では、巨額の資産デフレが襲いかかってくる。それが金利上昇と信用収縮を引き起こし、経済活動や社会を大混乱させる。いつのバブル崩壊でも起こることだ。

そこで、これは大変なことになったと、国や政府があらゆる対策を講じるわけだ。ところが、今回は天文学的な金額の資産デフレが発生し、国も政府も、はたまた中央銀行も打つ手なしの状況に追い込まれよう。

どうということか？

リーマンショックやコロナ危機を乗り越えようと、先進国中心にタガが外れたかのような金融緩和と大量の資金供給を連発してきた。

『大暴落！その時、どう資産を守り、育てるか』（2021.06.16 澤上 篤人）より

いま私たちは、バブルの中にいる (2/2)

その結果、各国の財政赤字は拡大の一途となり、国債の発行残高は巨額に積み上がった。また中央銀行の資産規模は異常に膨れ上がった。

各国政府はいわばボロボロの財政状態で、一体どんな対策を打てようか。バブル崩壊で債権市場は暴落し、それは長期金利の急上昇を招く。となると、金利コストの急増で国債発行もままならなくなり、対策費の調達すら難しくなる。

一方、各国の中央銀行も保有国債などの大幅値下がりにより、異常に膨らませた財務が急悪化する。それでなくとも、お金を大量にバラ撒いてきたのだ。インフレの火が燃え広がるのは、もう止めようがない。

そう、国も中央銀行も打つ手なしの状況に追い込まれていくわけだ。バブル崩壊や資産デフレで経済も社会も大混乱に陥っている。それに対し、国や中央銀行はなにもできない。

すると、どうなるのか？

想像を超えてひどいことになろう。場合によっては国の制度や仕組みのガラガラポンもあり得る。

もはや、国に頼ることはできない。自助の意志と意欲で、この難局を切り開いていくしかない。頼れるのは自分のみ。

『大暴落！その時、どう資産を守り、育てるか』（2021.06.16 澤上 篤人）より

「金融バブル崩壊」とは？ (1/3)

「大丈夫ですよ！ 今まで通りやりましょう。魔法の杖を使いましょう。去年の12月もあれだけの危機だったのに一気に収まったではないですか！ 魔法の杖の出番ですよ！」

2011年12月、もうユーロは崩壊と思われたその瞬間に、さっそうと現れた新しい救世主・ECBのドラギ新総裁はまさに大盤振る舞いよろしく107兆円という膨大な額を域内の銀行に投下して危機を収めたのです。「この手があるでしょう！ 魔法の杖は健在です！ 危機なんてお金を刷れば一発で解決です！」

「QE3はまだか！」市場関係者のFRBを見る目は常にこの一点です。リーマンショック後、見事に危機を収めたバーナンキ議長は英雄です。何をしたかって？ QE1、お金を刷りました。

そのお金で住宅担保ローン証券を買い取りました。そして米国債を買い取りました。「よくやった！」とりあえず危機は収まった！ところが1年でまたおかしくなると、今度も「魔法の杖だ」とQE2の出動、米国債を大量に購入しろと8か月にわたってドルを刷り続けたのです。

おかげ様でQE1、QE2とドルを印刷するたびに株価が反応、この好調な株価をベースにして米国経済は復活模様です。「魔法の杖は健在です！」お金さえ刷れば何でも解決です。

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉 慶）より

「金融バブル崩壊」とは？ (2/3)

「いつまで経ってもデフレじゃないか！」

「バーナンキとドラギを見習え！」

「何でお金をもっと刷らない！ 魔法の杖を使え！」

欧州や米国でしきりに魔法の杖を使っているのに、日銀は使っていないというのです。

日銀からすれば「そんなことはない、日本国民の皆さん、私たちはもう2000年から見れば10倍以上の国債買い取りを行っているのですよ。もう勘弁してくださいな」と言いたいかもしれませんが、そんな言い訳は許してくれません。日本国民はデフレ不況にもう20年も苦しんでいるのです。

「なぜ魔法の杖を使わない！ 首にするぞ！」

ついに国会議員はいきりたってきました。言うことを聞かないなら日銀法改正です。「目標を達成できないのであれば、責任を取らせろ、当り前のことだろう！」というわけです。

欧州も米国も日本もそして世界も、あらゆる市場関係者も常に視点は「魔法の杖を使うのか、使わないのか？」に釘づけです。中央銀行というマネー製造機関に頼るしかありません。

『2013年、株式投資に答えがある』(2012.06.09 朝倉 慶)より

「金融のバブル崩壊」とは？ (3/3)

にわかに関くこの勢いに、ふと正論が発言されます。日本では報道されず海外メディアの一部に小さく載るのです。

「中央銀行が国債の買入れを通じて、最終的に際限のない資金供給に追い込まれば、この膨大な通貨供給の帰結は、歴史の教えに従えば制御不能なインフレである！」

ワシントンでの白川日銀総裁の発言です。

日本の2012年の国債買い取り額は40兆円、一方で年間の新規の国債発行額は44兆円です。いやいやながら国債を買い続けている日銀ですが、もう毎年の日本の膨大な発行すべてを買い取るまでにその量を拡大してきているのです。

それでもご存じのように「足りない！」と国会でつるし上げにあっています。

完全なる感覚マヒ。一体どこまで、〈魔法の杖〉マネー製造装置の中央銀行が機能できると思いますか？

「インフレなんてまったく来ないじゃないか！」

その通り、しかしいつか確実に来るのです。それも何かのきっかけで突如爆発するのです。それが世界の歴史です！

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉慶）より

「国の制度や仕組み」とは？ (1/3)

神田昌典さんの本『2022 ---- これから 10年、活躍できる人の条件』がベストセラーになっています。私も買って読んでみたところ、非常に共鳴できるところが多く、感動しましたので、紹介しながら自分の見方を加えてみたいと思います。

神田さんはこの本で「今起きていることの意味を知りたければ 70年前を見ろ」と言ってます。歴史というものを考えてみるとやはり一つのサイクルで、人間は同じことを繰り返すという部分があるわけです。

そして神田さんは「今から 70年前、さらに 140年前を比較することによって、今起きていることの意味を考え、解決法を考えていくべきだ」と説いているのです。

では今から 70年前は何が起こっていたのでしょうか？

1941年、まさに真珠湾に日本が奇襲をかけて太平洋戦争の口火をきったのが、今から 70年前です。

今から考えれば、なぜあのような無謀な戦争に突入していったのか、まさに愚かな決断だったという結論になるかもしれません。ところが実際、当時の状況を考えれば、日本という国が袋小路状態に陥って、やむなく戦争に打って出ざるを得なかったという事情もわかります。

『2013年、株式投資に答えがある』(2012.06.09 朝倉 慶)より

「国の制度や仕組み」とは？ (2/3)

そして時代の波と言いますか、そのような決断に導いたのは当時の日本全体を覆うムードでした。

国内のあらゆる意味での行き詰まりから、外に活路を求めるしかなく、それを執拗に邪魔だてする欧米に対しては、これを打つべしという世論は止めようもなかったことでしょう。

仮に米国と戦争するとは自殺行為だなどという正論が主張されれば、当時であれば、臆病者と一蹴され、誰からも相手にされなかったことでしょう。まさに時代の猛烈な勢いというか、戦争に向かっていくあの時世に逆らうことなど誰にもできなかったと思います。

そして神田さんはあのような無謀な戦争に陥っていったのは、日本人個々の問題というよりは、もう日本を覆う組織自体が末期的な状況にあって、結果的には敗戦という強制的なリセットで止められるしかなかったと言っています。

天皇を中心とした大日本帝国という中央集権的な組織は、もう限界に来ていたということです。無条件降伏を突き付けられた日本が最後までこだわったのは〈国体の維持〉という天皇制の継続だったわけです。

そして今、日本で進行中なのは 70年前と同じプロセスだということです。

『2013年、株式投資に答えがある』(2012.06.09 朝倉 慶)より

「国の制度や仕組み」とは？ (3/3)

まさに日本は今さまざまな矛盾を抱えながら、その日本を覆ってきた組織を守ろうとして結果的に破滅的な道を歩もうとしているというのです。

そしてこれは日本人個々人が問題点を把握していないからという理由ではないというのです。逆に社会の第一線で働く個々の日本人たちは非常に優秀でいかなる問題が日本を覆っているかよくわかっている。

それなのに結局、自らの立場上は組織防衛という立場に立脚するしかなく、今の体制をいかに続けていくか、守っていくかということに奔走するしか選択肢がないというのです。

なぜかと言うと自分たちはその組織で踊っているからで、組織を否定することは自殺行為で自己否定になってしまうからです。

結局、非常に優秀な第一線で働いている日本人はまさに〈戦士〉たちなのです。

ただし、彼らはいざ、この時代の激しい荒波が訪れて社会に革命的な変化が起こった時は、戦犯として裁かれる運命にあるというのです。

繰り返しますが、そのような悲劇が起こるのは決して個々人の人格や人間性の問題ではなく、ただ単に組織が末期に来ているから起こることなのだと言っているのです。

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉 慶）より

「国や中央銀行はなにもできない」とは？ (1/3)

1400兆円の国民の金融資産に対して国債や地方債を合わせた債券という借金の額は1000兆円を超えています。続くはずがありません。しかし日本の中枢を担うエリートたちはこの国債の暴落を何としても止めるしかありません。民間の銀行も郵貯も年金も保険会社も日本国債が暴落したらお終いだからです。

彼らだって内心は国債をこれ以上買い続けるのは危ないと思っているに違いないのです。彼らだってこのまま日本が安泰でいられるとは思っているはずがありません。

しかし彼らの立場としてはもう国債の相場は危険水域だから、持ち高を減らしていこうという決断には至らないのです。

2月2日の朝日新聞の一面に三菱東京UFJが日本国債の急落に備えた〈危機管理計画〉を作ったことが報道されました。では実際に国債が暴落しそうになったら三菱東京UFJはどういう体制を取るのでしょうか？

当然、国の要請の下に日本国債の買い支えに走る事となるでしょう。これこそ組織防衛であり、日本国防衛ということなのです。

自分がそのような危機にその部署にいたと仮定してみてください。誰が考えても国と一緒にあって国債暴落を防ぐ立場となるしか、方法がないことがわかるでしょう。国家の一大事を助けるのは当たり前です。

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉慶）より

「国や中央銀行はなにもできない」とは？ (2/3)

では日銀はどうですか？

いざ国債が暴落し始めたらどうします？

国債の暴落が起こるということは、そもそもインフレ気味になるから起こるわけです。インフレ＝金利高＝国債暴落 という構図です。

インフレを抑えるためには、中央銀行は金利を引き上げてインフレを制御しなければなりません。ところが、すでに日本国は 1000兆円の借金がありますので、金利を上げれば国債の金利支払いができなくなり、即座に日本という国家は破綻します。

ゆえに金利は上げられない。ではどうします？

実は何の手もないのです。

マネーをさらに印刷して、輪転機を回して国債を買い支えるしかありません。そうなれば完全にハイパーインフレです。

しかし他のどんな手段があるというのですか？

国債が暴落し始めたら、日銀としては国の要請に従ってこれを買って支えるしかないではないですか！

『2013年、株式投資に答えがある』(2012.06.09 朝倉 慶)より

「国や中央銀行はなにもできない」とは？ (3/3)

保険会社だろうが、年金基金だろうが、郵貯だろうが、すべて同じです。

国債が暴落してきたら、必ず財務省から売りを止めるように、そして買い支えるように要請が入るはず。彼らはこの要請に従うしか方法はありません。

これだけ国債を購入してしまっただけ逃げ出すという選択肢はありません。国と一緒に一蓮托生です。

これこそ組織防衛なのです。日本国というこの巨大な枠組みを守るということなのです。

個々の銀行、保険会社単位では危機管理ということで一応、国債相場が暴落した時のシミュレーションを用意していることでしょう。まさに三菱東京UFJが作成したように、場合によっては果敢に国債を売却するという判断です。

でもいざとなれば、そんな作文は役に立たないのです。国と一緒に組織防衛に走るしかないからです。

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉 慶）より

「想像を超えてひどいこと」とは？ (1/2)

そしてその結果として、どうしても国債の急落を止めることができず、最終的に国債が大暴落して国も銀行も保険会社もすべてが金融破綻の憂き目にあったらどういことになりますか？

必ず民衆は銀行に押し掛けて叫ぶのです「金はどこへ行った！」と。

そして怒りをぶつけます「こんなインフレを招いたのは誰だ！」「なぜ自分たちの預金で屑になっていく日本国債を買い続けた！」と。

パニックになった民衆は怒り、その後市場が落ち着いてきた後は、自分たちを苦境に陥らせた犯人探しが始まります。まさに日本が国家破綻したから、その原因を究明しようということです。

その時、誰が戦犯になりますか？

誰が暴落必至の国債を買い支えたのか？ 誰が指示して日銀は金融を緩和し続けたのか？ なぜハイパーインフレになるのが明らかだったのに日銀は輪転機を回して国債を買い支えたのか？ その責任者は誰だ？ 保険会社はなぜ国債を少しでも売らなかったのか？

言い始めたらきりがありません。

『2013年、株式投資に答えがある』(2012.06.09 朝倉 慶)より

「想像を超えてひどいこと」とは？ (2/2)

要するに国債を買い支えて国家の破綻を防ごうとしたエリートたちは国民のお金をすべて紙きれにしてしまった戦犯、自らの組織を守るために国民を不幸に陥れた犯罪者となるのです。

神田さんはここまでは書いていませんが、戦前は陸軍大将になることが最高の栄誉でした。お国のために最も尽くした人たちが戦後は一変して犯罪者として裁かれた例を指摘しています。

かように時代の変わり目では英雄が突如として戦犯へ、輝いていた職業が最も軽蔑されるようになると説いています。

これを現代に当てはめれば、今、日本を何とかしようと頑張っているエリートたちは、いずれ国の方向を間違っ導いた張本人として世間から最も蔑まれる存在に落ちていくということです。

本人が悪いのではありません。ただ組織が末期に来ている、今の日本の場合がその通りなのです。

ですから、この組織に従事している最も優秀な人は、最も酷い目に合う運命が待っているということです。

これが冷然たる歴史の真実です。

『2013年、株式投資に答えがある』(2012.06.09 朝倉 慶)より

「ガラガラポン」とは？（1/4）

一方で神田さんは 140年前の明治維新に至る過程も検証しています。

70年前は天皇制という国体を守ろうとして無謀な戦争に突入して行った。そして焦土となった。ところが同じく日本の歴史の中でも最も激しい変化が起こったと思われる明治維新はどうだったのか？ という観点です。

この明治維新での驚きはその死者の少なさです。

江戸時代は 260年続いたわけで、この明治維新において一気に武士の時代が終わると同時に幕府の体制も終わりました。さらには大名はなくなり、藩は廃止、県が新たに作られた、廃藩置県です。

このような国家体制の革命的な変化において、一体世界の国において死者が数万人程度ですんだ例があるでしょうか？

近くは中国の文化大革命、カンボジアのポル・ポト派の大虐殺、スターリンの粛清、古くはフランス革命など歴史をひも解けば、数百万人、場合によっては数千万人の死者が出るのが歴史の事実であり、悲劇です。

ところがこの明治維新では 2.5万人の死者しか出なかったのです。当時日本の人口は 3200万人と言われているから、いかに死者が少なかったかがわかります。

なぜ、日本ではこのようなことが可能だったのでしょうか？

「ガラガラポン」とは？ (2/4)

日本人はその歴史において誇れる事実がたくさんありますが、この明治維新という大イベントに対しての死者の少なさなどは、日本人の素晴らしさを表す最も誇れることの一つではないでしょうか？

これについて神田さんは面白い見解を出しています。革命の〈血のエネルギー〉を〈祭りのエネルギー〉に変える仕掛けがあったというのです。

具体的には当時から〈おかげまいり〉と言って日本中の人々が伊勢神宮にお参りに行ったというのですが、本来は60年ごとに行われたこの行事が、いつもとは違って不規則に38年目の1867年から全国的規模で起こってきたというのです。

まさに明治維新の直前です。

当時この伊勢にお参りする〈おかげまいり〉は500万人の日本人が行ったというのですから、まさに日本人6人に一人がお参りしたわけです。当時の車もない鉄道もない交通事情を考えれば驚異というしかなく、この一つを見ても当時の日本人全体の国家観、ならびに宗教的な意識が想像できます。

そしてこの1867年から始まったお祭り模様では、日本中に伊勢神宮のお札や小判が空から降ってきたというような話が伝わりました。その中には16、17歳の娘が空から降ってきたというような噂も出て、結果的に日本全土にスピリチュアルブームが起こったというのです。それが一種の祭りの狂乱となって日本中を覆い尽くしたということです。

「ガラガラポン」とは？ (3/4)

その運動が〈ええじゃないか、ええじゃないか〉という国民的な祭りだったというのです。男も化粧し、ばあさんは娘の恰好をし、〈世直りだ、世直りだ〉と踊り狂ったというわけです。

他人の家に土足で入り込んで〈着物でも何でももらってええじゃないか〉と言うと、乗り込まれたほうも〈くれてやってもええじゃないか〉と応じたということです。

これはどういうことかと言うと、この時に日本は国家としての重大な決断を迫られていたわけです。一体幕府の体制を続けるのか？ 外国に対して開国をするのか？ 王政を復活させるのか？

これは国中の大きな問題であって、庶民レベルでもさまざまな考えがあったと思います。ただ庶民のレベルで言うとうなっていくのがいいのか、幕府がなくなるのがいいのか、それとも幕府体制が存続するのがいいのかわからないわけです。

ですからこの重大事を〈ええじゃないか、ええじゃないか〉と、一種、流れに任せるという形を選んだわけです。そしてこのような自らの選択を放棄したところが、かえって時の流れに身を任せる形となって争いが起きることなく、この明治維新という激動期を乗り切ることができたというのです。

これは驚くべきことです。日本人が自ら大変化のあることを予知して、争いを避ける道を、意識せずに全体として選択していったということです。

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉 慶）より

「ガラガラポン」とは？ (4/4)

これこそ日本人の凄さと言えるでしょう。血を出さずに革命が遂行できる民族は世界広しといえども日本人しかいないことでしょう。

そしてこれから来る、おそらく日本における壊滅的な変動なのですが、たぶん日本人は争うことなく、困難を乗り越えていくに違いありません。

2011年の東日本大震災で発揮されたように日本人は実は苦難にはとても強い民族です。苦難になればなるほど争いをやめて協力し、結束しあえるのです。

まさに〈絆〉です。

これから日本国債の暴落による国家破綻が襲ってくるのですが、140年前に〈ええじゃないか、ええじゃないか〉と変化を受け入れたように、日本人はその経済破綻を受け入れていくことでしょう。それができる民族なのです。

苦難は苦難ですが、それも人生の1ページです。人生など後で振り返ってみれば、困難な時ほど貴重な体験や真の友人を作ることができるものです。

神田さんは時代から時代への変化を上手くやることが重要だと述べています。

そして「変化に抵抗して強制的にリセットされるか、変化をええじゃないか、と受け入れるか、別の表現をすれば地獄を選ぶか祭りを選ぶか」と読者に問いかけているのです。

『2013年、株式投資に答えがある』（2012.06.09 朝倉 慶）より

【まとめ】金融バブル崩壊とその後

